

大学への帰属感と意味づけが学校不適應に及ぼす影響の探索

肥 田 幸 子
丸 岡 利 則
照 屋 翔 大
正 岡 元

愛知東邦大学

大学への帰属感と意味づけが学校不適応に及ぼす影響の探索

肥 田 幸 子
丸 岡 利 則
照 屋 翔 大
正 岡 元

目 次

- I. はじめに
- II. 研究方法
 - 1. 対象者と実施時期
 - 2. 調査内容と統計処理
 - 3. 倫理的配慮
- III. 研究結果
 - 1. 退学意思と入学時の高い帰属感あるいは不本意入学感との関連
 - 2. 調査内容と統計処理
 - 3. 積極性、主体性の欠如と不適応
 - 4. 積極性、高低得点者おける生活習慣の比較
 - 5. 学校不適応をなくすために必要なことの構成因子
 - 6. 学校不適応をなくすために必要なことを積極性高得点者、低得点者で比較する
- IV. 考察
- V. おわりに

I. はじめに

文部科学省の『平成27年度学校基本調査（確定値）』によると、平成27年度に新たに四年制大学に進学した者はおよそ62万人で、進学率は56.5%になる（過年度生含む）。さらに短大や専門学校といった高等教育機関全体への進学者を加えると、これらへの進学率は79.8%にのぼる。マーチン・トロウによる高等教育システムの発展段階の整理によれば、日本の高等教育はすでに誰もがその教育機会を享受することのできる「ユニバーサル」段階に置かれているといえる。このことは、学習者の教育を受ける権利を保障するという点で否定されるものではない。しかし各大学は「いかに学生を大学（というシステム）に適応させるか」という新たな課題に向き合う必要にさらされるようになったともいえる。先行研究によると、現在は問題なく通学している学生の中にも15～20%の割合で不適応状態を感じている学生がいることが明らかになっている（西垣・小林 2004 : 33）。その意味では、学生の適応／不適応をめぐる問題は、特定の学生の課題というよりも、現代の学生に共通した課題として位置付けることが重要である。

いかなる要素が大学生の不適応（または不適応感）を惹起するののかについては、すでにいくつかの知見が提出されている。安藤は、大学生の不適応や適応異常には、学業面での不適応と精神的・心理的不適応の2つがあり、特に前者の構成要素である「学業不振」の重大性を指摘する（安藤 1971：94）。学業不振の背景には、進路指導や進路選択の失敗、大学進学適正の欠如などの諸要因だけでなく、精神的・身体的健康要因、経済生活の困難度などの諸要因も絡まり合っていて、学業不振が先行して精神的・心理的不適応が発生するケースも少なくないからである。田中は、不適応の一例として大学生の不登校を取り上げ、その背景には「自分のなかの違和感」（入学前に抱いていた大学イメージと実際の大学生活との差異、自分の思い通りに進まないなど）と「外的世界との違和感」（漠然とした違いの感覚や居心地の悪さなど）という、異なる種類の「違和感」が存在することを明らかにしている。特に、不本意入学の場合には、不登校同様、「自分の中の違和感」を抱えやすいという指摘（田中 2000：149）は重要である。このような指摘は、山田にも共通しており、不本意入学や入学後の不本意感¹⁾が不登校につながりやすいこと、不登校がやがて休学や早期の進路変更（転学や退学）といった不適応行動につながっていくことを指摘している（山田 2006：30）。また竹端・佐瀬は、不適応を惹起する要因としてこれまでの研究が、①対人関係（とりわけ友人関係）、②心身の不適応状態（疲労や抑うつ状態）、③生活リズムの不適応（生活の不規則やそれを要因とした疲労）、④逃避行動、⑤スチューデント・アパシーに着目してきたとして、その動向を整理している（竹端・佐瀬 2015：65-71）。

以上のような不適応（または不適応感）の要素を抽出するだけでなく、それらの要素の影響力の違いについて検討した中村・松田による一連の研究は注目に値する。中村・松田（2013）は大学不適応、大学満足、就学意欲に影響する要因について首都圏の四年制大学学生を対象にした質問紙調査から明らかにしている。それによると、大学不適応に直接的な影響を持つものは、「授業理解の困難さ」と「入学目的の明確さ」であり、「友人関係の良好さ」は「大学への帰属意識（大学への愛着）」を媒介にして間接的影響にとどまることを示唆している（中村・松田 2013：151-160）。また中村・松田（2014）では、同様の質問項目での男女差を明らかにしている。それによると、男子学生については「授業理解が困難であり、大学への愛着が乏しく、入学目的が不明確であるほど、大学不適応傾向が高いが、友人関係満足度は直接的に影響しないこと」（中村・松田 2014：16）、女子学生は、「授業理解が困難で大学への愛着に乏しいほど大学不適応傾向が高いが、友人関係満足度と入学目的の明確さは、直接的には大学不適応には影響しない」（同上）という。さらに中村・松田（2015）は、大学不適応と出席率、GPAとの関連について明らかにしている。それによると、大学不適応感は出席率の低さに影響し、その出席率がGPAの高低に影響することが示され、特に男子学生においては、大学不適応感が直接にGPAの低さに影響する傾向が確認されたという。以上を踏まえ、大学不適応感の明確化が「怠学や成績不振、牽いては、留年や退学を予測する有効な指標であることを示唆する」（中村・松田 2015：144）ものであると指摘している。

以上の先行研究から、大学に対する不適応感が、大学への入学前から入学後を通して得られる

様々な要因によって引き起こされるという関係性を確認することができよう。しかしながら同時に目を向けなければならないことは、これら諸要因の関係性が個々の大学によって異なる可能性が高いという、大学個別の文脈への着目である。例えば、武内（2008）は大学を設立年、入学偏差値、学生数、大学種別という指標を用いて4つの類型、すなわち、「伝統総合大学」（1949年以前の設定）、「中堅大学」（1960年代以前）、「新興大学Ⅰ」（1989年以前）、「新興大学Ⅱ」（1990年以降）に分類し、それらの間には大学の進学理由や満足度という点で異なる傾向を見出すことができることを明らかにしている。このことは、大学ごとに在籍する学生の志向性に差異が認められ、そのため何が学生にとっての満足度を引き上げるのか、または不適応感を惹起するのかが変わりうることを示唆する（武内 2008：10-15）。

以上の先行研究の成果も踏まえながら、本稿は、東海地方の小規模私立大学（以下、A大学とする）を事例校に、大学への帰属感の違いが大学または大学生活への意味づけにいかなる違いをもたらしているのかを明らかにする。具体的には、大学に対して不適応感を感じている（またはこれまでに感じたことのある）学生とそうでない学生との間で、①大学への帰属感、②大学生活への積極性、③学生生活を充実させるための具体的な要望という点でいかなる違いがみられるのかを検討する。その上で、検討を通じて明らかになる事例校の特徴をもとに、学生の学校適応促進に向けた手立てに関する論点の提示を試みる。

Ⅱ．研究方法

1. 対象者と実施時期

2015年12月、A大学1年生から4年生138人（男子学生87人、女子学生51人）を対象に調査を実施した。調査はウェブページ上のアンケートで行った。学生に自身の所有するスマートフォンを利用して調査用のウェブページにアクセスさせ、質問に回答を依頼した。調査用のウェブページは共同研究者が管理するサーバ上に構築することで、回答内容が著者らの他に漏れることがないようにしている。また回答した学生は学籍番号とは異なる固有の識別子で示され、重複回答を防ぐことができるが、個人を識別することはできない。

2. 調査内容と統計処理

基本属性（性別、入学年度）、入学時の気持ちを聞く質問1問、退学意思を持ったことがあるかないか1問、退学を考えた時期1問、大学を卒業しようとする動機に関する質問20問、退学しないためには何が必要かを聞く質問18問、生活習慣を聞く質問9問等の項目を目的に合わせて作成して用いた。卒業動機と必要性の質問については、各質問項目に対し「1 そうである」から「4 そうではない」までの4件法で求めた。得られたデータの統計処理には統計解析ソフトPASW Statistics 18 SPSSを用いた。

3. 倫理的配慮

学生には①調査の目的、②自由意志による回答、③個人は特定されないこと、④目的以外には使用されないことを口頭で伝えた。①、②は質問ページの冒頭にも記した。得られたデータは数値の処理を施した後、全て消去した。

III. 研究結果

1. 退学意思と入学時の帰属感との関連

調査対象者のうち退学を考えたことがある学生を不適応可能性あり群、考えたことがない学生を不適応可能性なし群とした。あり群、なし群の入学時の気持ちはTable 1のようであった。

Table 1 不適応可能性と入学時の気持ち

入学時の気持ち	不適応可能性	
	あり群	なし群
望んだ大学であったのでとても嬉しかった	7	41
第1志望ではないがこの大学でよいと思った	9	38
行きたくないがここしかなかった	7	12
大学はどこでもよかった	6	18

入学時の気持ちのうち、「望んだ大学であったのでとても嬉しかった」は入学時の高い帰属感と考えることができ、「行きたくはないがここしかなかった」は不本意入学であり、当初の帰属感は低いと考えることができる。不適応可能性あり群、なし群、高い帰属感、低い帰属感の2変量の χ^2 検定を行った。 $\chi^2=4.08$, $p<.05$ で有意差があった。(Table 2)

Table 2 不適応可能性と入学時の気持ちの χ^2

	不適応可能性		合計
	あり群	なし群	
高い帰属感	7	41	48
低い帰属感	7	12	19
合計	14	57	67

高い帰属感をもつ学生と低い帰属感の学生では不適応可能性に明らかな違いがあるといえる。

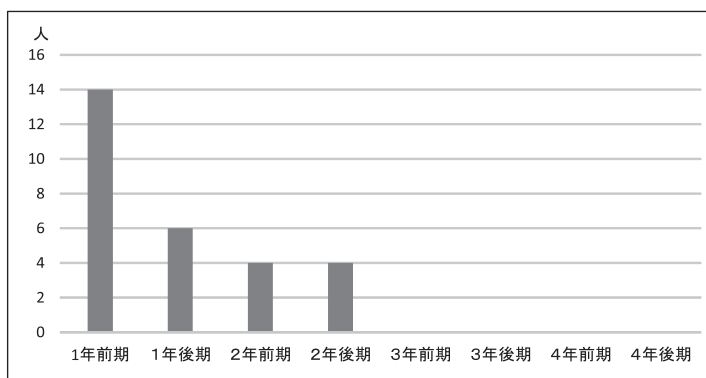


Figure 1 退学を考えた時期

この帰属感に関しては入学当初のものであるが、Figure 1のように退学を考えた時期は1年生前期が高いため、この時期の帰属感情は重要であるといえる。

2. 大学を卒業しなければならない理由の構成因子

大学を卒業しなければならない理由に関する質問20項目に対して因子分析を行った。固有値の変化から2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子構造を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行ったところ明確な2つの因子が得られた。(Table 3)

各因子は以下のように解釈された。第1因子は「今、大学で学んでいる内容がとても面白い」「大学進学は自分の選択なので卒業したい」「大学で学んでいることが将来に役立つと感じている」という項目が高い正の負荷を示している。このように大学生活を積極的に楽しんだり、将来につなげたりしようとしている項目であるため「積極性」因子と命名した。第2因子は「現在、大卒なんて当たりまえだから」「大卒でないと将来、いろいろなことで不利だ」「途中でやめるなんて意志が弱いと周りに思われる」という項目が高い正の負荷を示している。このように大学は卒業したいが、周囲の状況に動かされ主体性が感じられないので「主体性の欠如」と命名した。

各因子の内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、積極性 $\alpha = .826$ 、主体性の欠如 $\alpha = .835$ と十分な値が得られた。(Table 3)

Table 3 大学を卒業したい理由の因子分析結果

	I	II
積極性因子 ($\alpha = .826$)		
今、大学で学んでいる内容がとても面白い	.846	-.217
大学進学は自分の選択なので卒業したい	.801	-.130
大学で学んでいることが将来に役立つと感じている	.666	.005
友人と過ごすキャンパスライフが楽しくて続けたい	.595	-.012
取りたい資格がある	.520	-.083
就きたい仕事がある	.519	-.071
自分の人生設計にとって大学卒業は必要	.494	.326
クラブ・サークル活動が楽しいので続けたい	.433	.057
せっかくここまで続けたのでやめるのはもったいない	.416	.188
自分に自信がないので大学で自信をつける	.398	.287
主体性の欠如因子 ($\alpha = .835$)		
現在、大卒なんて当たりまえだから	-.068	.802
大卒でないと将来、いろいろなことで不利だ	-.161	.790
大学を卒業しないと就職に不利だ	-.211	.629
途中でやめるなんて意志が弱いと周りに思われる	.007	.578
家族のなかでは大卒があたりまえだから	.070	.546
仲間が卒業するのに自分だけやめるのはいやだ	.263	.540
今やめると友だちにより評価をされない	.269	.509
先生から大学は出ておくとアドバイスされた	.041	.479
親が大学を卒業することを望んでいる	-.098	.428
大学を卒業しようと決めたから	.204	.373

3. 積極性、主体性の欠如と不適応

因子I「積極性」と因子II「主体性の欠如」が「不適応」とどのような相関を示しているかをTable 4に示した。

Table 4 積極性、主体性の欠如と不適応の相関

	積極性	主体性の欠如	不適応
積極性	—	.568**	-.313**
主体性の欠如		—	-.059
不適応			—

積極性を示した学生の回答は不適応を示した学生の回答に有意な負の相関を示し、主体性の欠如は不適応に有意な相関があるとはいえない。つまり、大学生活に楽しみや意味などを積極的に見いだしている学生の学校不適応はあまりなく、大学を卒業したいと考えているが、大学生活の意味づけが漠然としており、なんとなく大学卒業をと考えている学生は不適応を示すことが多いという結果であった。

4. 積極性、高低得点者における生活習慣の比較

積極性の高い学生上位30名（以下高得点者と記す）と下位30名（以下低得点者と記す）の生活習慣得点を比較した。（Figure 2）

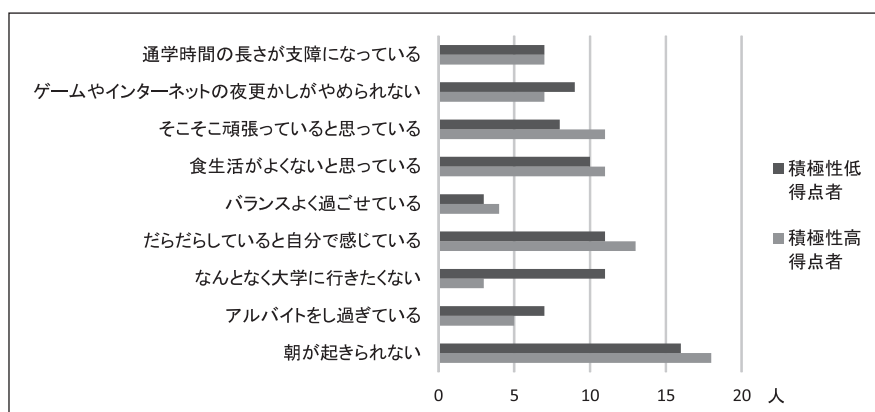


Figure 2 積極性の高低得点者と生活習慣

ほとんどの項目において大きな差はないが、「なんとなく大学に行きたくない」に関しては、上位30名と下位30名との間で2変量の χ^2 検定を行ったところ $\chi^2=5.96$, $p<.05$ で有意な差があった。

Table 5 積極性高低者と「なんとなく大学に行きたくない」

	なんとなく大学に行きたくない		合計
	ある	ない	
積極性高群	27	3	30
積極性低群	19	11	30
合計	46	14	60

5. 学校不適応をなくすために必要なことの構成因子

学校不適応をなくすために必要なことを聞く18問の質問項目の因子分析を行った。固有値の変化から3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な負荷量を示さなかった2項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。(Table 6)

Table 6 学校不適応をなくすために必要なことの因子分析

項目内容	I	II	III
学生生活に関する要望因子 ($\alpha=.912$)			
悩みというほどではないが、気軽に相談する場所がある	.901	-.007	-.027
奨学金のことや将来のことについて気軽に相談できる場所がある	.823	.103	-.049
取得単位や就職その他についてもっと気軽に職員に聞ける	.793	.143	-.071
施設がきれいで整っていること	.758	.116	-.108
友達の作りやすい環境がある	.754	.004	.091
授業時間が空いたときに過ごせる場所がある	.717	-.170	.085
雑談したり、昼食後の居場所となるスペースがある	.606	-.106	.110
就職に向けた講座が数多く準備されている	.592	.064	.032
学業や資格に関する要望因子 ($\alpha=.823$)			
学びたい授業を多くする	-.040	.927	-.047
授業時間割が取りやすいように配慮する	-.020	.821	.080
分からないところや興味のあることを教員に質問しやすくする	.019	.763	.036
取得できる資格を多くする	.104	.592	.089
自習パソコンを多くする	.224	.315	-.101
課外活動への要望因子 ($\alpha=.815$)			
部活動やサークル活動の施設を充実させる	.126	-.137	.785
部活動やサークル活動がもっと活発になる	.151	-.071	.739
部活動やサークル活動での不満や要望が言いやすい形にする	-.155	.298	.711

各因子は下記のように解釈された。第1因子は8項目で構成されており、「悩みというほどではないが、気軽に相談する場所がある」「奨学金のことや将来のことについて気軽に相談できる場所がある」「取得単位や就職その他についてもっと気軽に職員に聞ける」など、相談できる場所や雑談のスペースの要望であるため「学生生活に関する要望」と命名した。第2因子は5項目で構成されており、「学びたい授業を多くする」「授業時間割が取りやすいように配慮する」「分からないところや興味のあることを教員に質問しやすくするなど、授業や資格等に関する要望であるため「学業や資格に関する要望」と命名した。第3因子は3項目で構成されており、「部活動やサークル活動の施設を充実させる」「部活動やサークル活動がもっと活発になる」「部活動やサークル活動での不満や要望が言いやすい形にする」など、部活動やサークル活動に関する要望であるため「課外活動への要望」と命名した。

各因子の内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、学生生活に関する要望 $\alpha=.912$ 、学業や資格に関する要望 $\alpha=.823$ 、課外活動への要望 $\alpha=.815$ と十分な値が得られた。

6. 学校不適応をなくすために必要なことを積極性高得点者、低得点者で比較する

平均値のグラフはFigure 2のようであった。

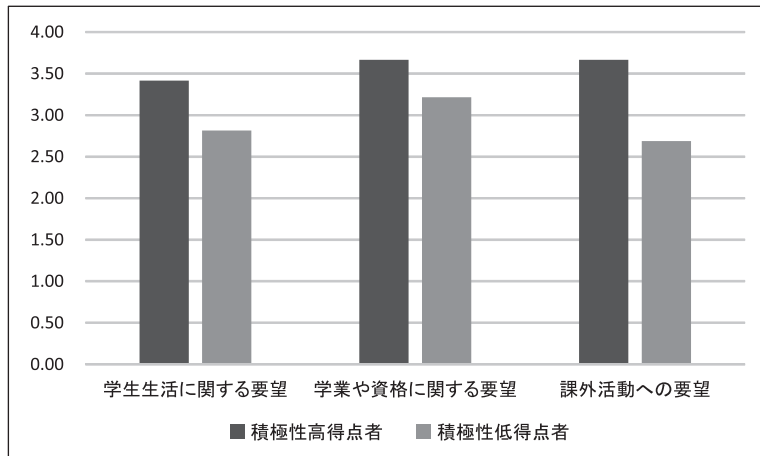


Figure 2 積極性の高低得点者と不適応をなくすための要望平均値

各因子の積極性高得点者と低得点者の間で、大学に対する要望に差があるのかを検討するために、平均値の差の t 検定を行った。その結果、学生生活に関する要望 ($t(30)=3.08, p<.01$) 学業や資格に関する要望 ($t(30)=2.55, p<.05$) 課外活動への要望 ($t(30)=4.75, p<.001$) であった。(Table 7)

Table 7 学校不適応をなくすために必要なことの因子分析

	高得点者		低得点者		t値	df
	平均	SD	平均	SD		
学生生活に関する要望	3.42	0.60	2.82	0.88	3.08**	58
学業や資格に関する要望	3.67	0.47	3.21	0.85	2.55 *	58
課外活動への要望	3.67	0.49	2.69	1.02	4.75***	58

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

大学卒業に関して、積極性の得点の高い学生は低い学生に比べて大学がどのようになっていけばよいかという要望についても高い欲求を持っているといえる。

IV. 考察

この研究は、大学不適応を引き起こす様々な要因のなかから、大学への帰属感が及ぼす影響との関連から出発し、さらには卒業の理由や不適応の抑制要件などの調査結果の分析から先行研究とを比較検討しながら、学生生活への意味づけの方向を探るものである。

調査結果から学生生活の充実に結びつけられるものは、大学に対する帰属感であり、それが学生生活の意味づけと関連している。つまり大学に対する帰属感が高ければ不適応が低く、それが大学生生活の充実とつながっていること、そして大学不適応には、つねに要因への積極性や主体性の相関が通底していることが判明した。しかし、このように積極性や主体性が強調されているが、ここでは、そのまま直截には意味づけと結びつけない。本節では、それを補完するものを転換点

として提示したい。

まず学生生活に対する不適応の要因である帰属感に関する先行研究と調査結果との比較検討から見てみよう。帰属感とは、本稿の冒頭の引用で、不適応に対して直接的に起因するものが「授業理解の困難さ、大学への愛着、入学目的の明確さ、友人関係満足度」であり、そのなかでも「愛着」として捉えられていた（中村・松田 2013：18）。さらに、「大学の帰属意識は大学生の大学適応を促す強力な要因」であるとも言う（中村・松田 2013：18）

一方、研究結果では、まず入学時の帰属感の有無が与える契機として捉えられ、それは、入学当初の時点で決定的であることが見られた。これは、Table 1の「行きたくはないがここしかなかった」や「大学はどこでもよかった」という不本意入学に見られる不適応可能性を示しているが、そこから帰属感のない不本意入学後の学生生活の不適応を抑制できる転換点がどのように可能だろうか。

それでは、ここからいくつかの転換点を取り出してみよう。

もし帰属感に代わるオルタナティブが見いだせるならば、それは「不本意」入学生を「本意」にさせることにつながる。すなわち、まず考えられる転換点は、帰属感の希薄な不本意入学生が「積極性や主体性」という学生生活の充実につながる転換ができるような道筋が求められる。この道筋があれば、不本意入学生は、不適応への抑制が可能となるだろう。調査では、帰属感を超えて「卒業したい理由」が優先するのかが問われる。

しかしながら大学不適応について卒業理由との相関において、Table 4では、卒業しなければならない理由が明確ではない「主体性の欠如は不適応に相関があるとはいえない」となった。このことは、Table 4の分析で示したように、卒業が持つ意味が帰属感とは相関がないものの、「大学は卒業したい」ということだけでは、大学生生活の意味づけにつながらないということである。それは、むしろ「大学生生活に楽しみや意味などを積極的に見いだす」ことにあるだろう。

次の転換点は、まさに大学生生活が充実すること、すなわち意味が見いだせることにあるだろう。「はじめに」でも引用した中村・松田論文では、さらに「大学への愛着は、大学不適応に直接的な負の影響を与える要因であると同時に、友人関係満足度や入学目的の明確さと大学不適応との間であって不適応に対して抑制的な影響を及ぼす媒介要因であることが示された」（中村・松田 2013：19）とあるが、帰属感を超えて、次のステージである学生生活への意味づけへ転換はどのように可能だろうか。

学生生活の意味づけについては、この調査では、生活習慣ということと、大学不適応抑制のための方策という側面だけに限定した。まず、生活習慣における積極性とそうではない得点学生の比較からみて、「何となく大学に行きたくない」（Table 5）という項目の有意差だけが突出して、積極性の高低から見て、生活習慣を表す決定的なものとなっている。これが不適応との関連を表しているのかは不明である。しかし、「何となく大学に行きたくない」という学生自身の生活習慣としての意識が積極的な学生には見られないということから、学生生活の意味づけの可能性がないとはいえない。

さて、帰属感から意味づけへの転換点としての最終地点は、学校不適応についての抑制策である。先行研究では、学生への働きかけとして、授業理解を促すこと、友人関係を築きにくい学生に対して的確な環境支援、高等学校に対する広報活動および入試方法に一層の創意工夫、学生の視点で大学の施設設備の充実化、教員が学生にとって好感の持てる存在などが挙げられている（中村・松田 2013：160）。それに対して、調査結果は、方策としての観点というよりも、積極性への関与を軸にして、Table 6で見たように「環境」「学業や資格」「課外活動」への要望が不適応を抑制する方策として有効であることを示している。それは、Figure 2で、積極性の高得点者が同時に要望についても高い要求があることが見られたことでも理解できる。したがって、これを学生生活の意味づけという視点から見ると、積極的ではない学生の意識が変容し、Table 7で説明したように、この要望が高い学生という資質や事態へと転換することが不適応の抑制につながるだろう。

V. おわりに

本研究は、学校不適応には、帰属感という要因が影響を及ぼしていること、それと学校生活の意味づけという視点から眺めた。その視点とは、学校適応を促進するための方策ということよりも、積極性や主体性を高めるための意味づけが必要であると考えられる。

そのためには、調査結果のTable 6にあるように、環境、学業・資格などの要望を持つ学生に変わることはない。積極性に向かう可能性とは、要望という資質や事態を獲得するだけではないし、調査結果にある外部要因だけでもない。

それには、例えば意識などについての内部要因であるアイデンティティと大学生活の関連から、学習意欲をはじめ、大学観や大学満足など大学生活への意味づけとしての先行研究がある（松島・尾崎 2013：1-2）。このような何らかの契機も学生生活の充実につながる可能性があるだろう。

むろん多様な要因についてのカテゴライズは、これだけではない。意識に関わる内部や外部以外のシンボリックな要因などの区分もさらに可能なので、今は抽象のレベルが一定していない段階であるが、今後の課題として、大学不適応を引き起こす要因から脱出するためには、意味のある大学4年間を過ごそうとする契機を何らかのポイントで成立させていくことにかかっているのではないだろうか。

注

1) 不本意入学と入学後の不本意感については、小林（2000）が詳細に類型化している。まず不本意入学は、①第一志望不合格型（第二志望以下の大学に入学してきた場合。第一志望での目的意識が高ければ高いほど、不本意感が強くなる）、②合格優先型（志望する大学はほかにあったが、合格の可能性を優先した場合。入学に際しての妥協が後悔につながり、転学部などの進路変更を考えやすい）、③就職優先型（求人倍率の高い学部や専門性の高い学部であることを優先する場合）、④家庭の事情型（両親の経済的事情や大学についての考え方によって、この大学した受験できなかった場合。本人の興味や希望とずれていると、不本意感を持ちやすくなる）、⑤学歴目的型（大学に行く気はなかったが親に進められて、または高卒での就職先が少ないから仕方なく進学したという場合）

の5つに類型化される。また入学後の不本意感については、学部・学科への直接的な不満（授業が面白くない、単位が取れない、教員への不満、専攻の振り分けなど）、興味関心とのミスマッチへの気づき（学びたいと考えていたことが学べない、希望する資格や免許が取得できないなど、学生生活上の課題（施設設備など環境的要因への幻滅、人間関係のトラブルなど）など様々な要因がきっかけとなるとしている。

引用文献

- 安藤延男（1971）「大学生の不適応」『教育心理学年報』第10集、94-103頁。
- 小林哲郎（2000）「大学・学部への満足感—学歴・転学部・編入・再受験」小林哲郎、高石恭子、杉原保史編著『大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド』ミネルヴァ書房、56-72頁。
- 武内清（2008）「学生の視点からの学士課程教育」『IDE 現代の高等教育』No.498、10-15頁。
- 竹端佑介・佐瀬竜一（2015）「大学生の不適応について—不適応状態の判断と過剰適応の視点から—」大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部紀要『国際研究論叢』第28巻第3号、65-71頁。
- 田中健夫（2000）「大学生にとっての不登校」小林哲郎、高石恭子、杉原保史編著『大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド』ミネルヴァ書房、141-160頁。
- 中村真・松田英子（2013）「大学生の学校適応に影響する要因の検討—大学不適応、大学満足、就学意欲に着目して—」『江戸川大学紀要』第23号、151-160頁。
- （2014）「大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響—帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能—」『江戸川大学紀要』第24号、13-19頁。
- （2015）「大学への帰属意識が大学適応に及ぼす影響(2)—出席率、GPAを用いた分析—」『江戸川大学紀要』第25号、135-144頁。
- 西垣順子・小林正信（2004）「大学生活への適応状況に関連する要因についての調査」『信州大学教育システム研究開発センター紀要』第10号、25-35頁。
- 松島るみ・尾崎仁美（2013）「大学生のアイデンティティとその関連要因」『京都ノートルダム研究紀要』第43号、1-13頁。
- 山田ゆかり（2006）「大学新入生における適応感の検討」『名古屋文理大学紀要』第6号、29-36頁。

受理日 平成28年3月14日